

第一部 軍艦島は「地獄島」ではなかつた

映画『軍艦島』では朝鮮人労働者の悲惨な様子ばかりが描かれており、『軍艦島に耳を澄ませば』や『筑豊・軍艦島』などに登場する韓国人証言者は「極めて低劣な衣食住の条件下、言語を絶する危険な重労働、差別待遇とリノチに明け暮れる毎日であった」と主張しています。このような韓国側の認識は果たしてどうまで真実なのでしょう。

第一部では元島民の方々の証言、専門家の研究資料及び著者が平成二九年一一月に現地調査を行った際に得た情報などを基に、当時の端島の実態を具体的に明らかにしてまいります。



第六章 朝鮮人虐待行為はなかつた

「眞実の歴史を追求する端島島民の会」設立

戦前・戦中の端島を知っている人たちは、映画『軍艦島』の予告編を観て、内容があまりに事実とかけ離れていることに驚愕しました。

「これを眞実として世界に発信されでは、元島民のみならず、日本人全体の名誉も誇りもズタズタにされてしまう」そう感じた元島民の人々はとても黙つていられませんでした。

当時八八歳だった松本栄さんが中心となり、仲間が集まつて平成二九年一月二三日に「眞実の歴史を追求する端島島民の会」（以下「端島島民の会」）を立ち上げ、歴史の歪曲・捏造を乱すための情報発信活動が始まりました。

「軍艦島と呼ばれた端島で、ナチスドイツによるホロコーストのような非人道的行為は一切ありませんでした」

端島島民の会は平成二九（二〇一七）年五月下旬に南ドイツ新聞にこのような抗議状を送っています。同新聞社は平成二七（二〇一五）年七月六日付で端島について次のように書いていたのです（注1）。

- ①大戦中日本人労働者は安全な場所に移され、中国と韓国の強制労働者に代わった。
- ②彼らの一〇〇〇人以上が死亡した。
- ③死体は海か廃坑に投げ入れられた。

これらは全く何の根拠もありません。死体を海に投げ込めば、岸辺に流れ着いて「殺人事件」として大騒ぎになるはずです。

しかし「こんな荒唐無稽なデタラメは誰も信じないだろう」と油断して放置しておくと、いつのまにか「眞実」として全世界に浸透してしまいます。南ドイツ新聞は今のところ記事の訂正に応じていませんが、このような抗議活動を確實に粘り強く行うことが「フェイク情報」の蔓延を防ぐために何より必要でしょう。

端島島民の会の活動を、心ある日本人はこそつてバツクアップすべきではないでしょうか。

「おかあさん あいたいよ」 落書きはヤラセだつた

『軍艦島——恥ずかしい世界文化遺産』に登場し韓国メディアも取り上げている「おかあさん、あいたいよ」などの落書きは端島には存在しません。これが発見された場所は、筑豊にある豊州炭鉱の朝鮮人徴用工用の寮であり、しかも「ヤラセ」でした。落書きが書かれた絆縛につきましては、平成一二年一月三日付『西日本新聞』に詳しく述載されておりますので以下引用いたします（注2）。

（見出し）

「朝鮮人強制連行悲劇のシンボル」「慟哭の壁文字は演出」「映画口ヶで刻む」「元スタッフ証言」

（記事）

強制連行された朝鮮人の「慟哭の詩」として有名な福岡県・筑豊炭田のハングルの壁文字が戦後の映画製作の際、スタッフによつて演出として書かれたものであることが二日明らかになった（中略）壁文字は「おかあさん会いたい／腹が減ったよ／故郷に帰りたい」という内容で豊州炭鉱（福岡県川崎町）の朝鮮人寮の壁に書かれていた。西日本新聞の調査では、在日本朝鮮人総連合会傘下の日本朝鮮文学芸術家同盟（東京）が日韓条約に反対する運動の一環として一九六五年に映画『乙巳年の賣國奴』を製作。強制連行の痕跡を盛り込むため、スタッフ四人が筑豊で口ヶ。壁文字はその際、廃墟となつていた寮の壁に書いた。文章は現場で話し合つて決め、録音担当の女性が棒切れで壁に刻み込んだという。

西日本新聞の取材に応じた元映画スタッフは、壁文字を書いた当時の状況や心境を次のように語つた。

――文字を書いた理由は

元スタッフ 強制連行は映像資料が少ないのでしょう。それに（朝鮮人寮は）廃屋で撮るものがなかつた。監督が「（連行されてきた人々の）思いがあつた方がいいじゃないか」と。その他のスタッフも「それがいい」となつた（中略）

――勝手に文字を書くことに抵抗はなかつたか

元スタッフ なかつた。映画人として演出したことですから。

――なぜ今事実を語る気になつたのか

元スタッフ 二年前に雑誌で壁文字を初めて見た。知人に相談したらあちこちの本や

雑誌に出ていると聞いて驚いた。壁文字は連行された人々の思いを表現しているが、演出が事実として独り歩きすることは良くないと思った。(後略)

このように、日本ではとうの昔に「ヤラセ」であると判明していることが、韓国では「眞実」として定着しており、子供向け絵本にもしっかりと書かれ、韓国のMBC放送も史実としてお茶の間に流しているのです。

子供に重労働はさせなかつた

『軍艦島——恥ずかしい世界文化遺産』には、一二歳の少年までが連行されて端島炭鉱で毎日酷使された様子がこれでもかとばかり書かれています。これは本当なのでしょうか。

実は戦前も工場法という法律があり、炭鉱の坑内で一六歳未満の者が働くことは禁止されていました。『軍艦島の遺産』(後藤恵之輔・坂本道徳著(長崎新聞社))によれば、昭和一四年八月に二十五歳以上の女子にも坑内就業が許可され、同一五年四月には一週間二回以内八時間限度とする一六歳未満の年少者の坑内就業を認めたとあります。

しかし、筆者が元島民の方から話を聞いた限り、そのような年少者が働いた事実はなく、恐

らく例外的な処置であつた可能性が高いでしょう。もし労働したとしても「一週に二回以内八時間を限度」という厳しい制限によって保護されており、子供向け本にあるような「一二時間以上働きノルマを達成しなければ地上に出ることは許されませんでした」というのは明らかに作り話です。

また、前出の三輪宗弘九州大学教授は、炭鉱関係資料を精査した結果、徵用された朝鮮人労働者のほとんどが一六歳以上であり、数え年と満年齢の関係でごくわずかに一五歳がいたことを明らかにしています。

常識から考えても、子供を朝鮮から連行して坑内で労働させるなどありえません。足手まといになるだけであり、作業効率が落ち、危険ばかりが高まるからです。

朝鮮人坑夫には危険な作業をさせなかつた

「朝鮮人には最先端の最も危険な場所で作業をさせた」という非難についてはどうでしょう。著者は平成二九年一一月末に端島(軍艦島)視察の一環として長崎市内の「軍艦島デジタルミュージアム」を訪問しました。ここには当時を生きてきた方が説明員を務めておられ、「朝鮮半島出身者に危険な場所で仕事をさせたのですか」との筆者の質問に対してもこう話してくれ

ました。

「とんでもありません。慣れない者に危険な作業はさせられません。事故でも起こされたら落盤やガス爆発のような大事故に繋がります。危険な作業は熟練した日本人がやつていました」

「事故がおこれば全員の命が危ない。坑内は日本人も朝鮮人も運命共同体でした」

当時は日本人も朝鮮人も同じ現場で働いていました。坑内では掘進、採炭、充填、運搬などの一連の作業があり、お互いが力を合わせて慎重に仕事をしなければ、作業の能率が落ちるどころか落盤などの恐れもあります。特に最先端の危険を伴う場所での作業は熟練した者が行う必要があり、経験を積んだ日本人がこれに当たりました。一步坑内に入れば日本人も朝鮮人もいません。全員が運命共同体であり、一心同体となつて作業を進めていたのです。

『軍艦島に耳を澄ませば』には中国人労働者の証言として「坑内でガス漏れが発生したが、日本人の主任監督は中にいる中国人労工の生死を顧みず、急いで坑道の入り口を塞がせようとした」という記述があります。映画『軍艦島』の中で、ガス爆発事故が起り、朝鮮人を中心に残したまま火災が発生した坑道の入り口を塞ごうとする場面がありますが、シナリオを書いた人

物は、恐らく『軍艦島に耳を澄ませば』のこの部分から思いついたのではないでしようか。

しかし朝鮮人より、さらに不慣れな中国人だけで作業させるはずがありません。同書の中で、ある中国人労働者は「私は日本人が穿孔、発破をしたあとを掘進するのにつかされた」と証言しています。日本人と中国人は一緒に働き、危険な作業は日本人が受け持つていたことがこの本の中でも明らかなのです。

ツルハシでの作業はなかつた

「腹ばいになつたり横になつたりして、ふんどし一つで狭い二尺層（約六〇センチの層）をツルハシで掘つた」という韓国側の証言はどうでしょう。

実はツルハシで掘るような作業は明治時代の話であり、端島では大正時代から機械化が進んでいました。この間の事情については前出の『軍艦島の遺産』に詳しく出ていますので、その部分を引用したいと思います。

大正時代から戦前の期間においては、採炭技術の革新があり合理化が図られた。第一に、採炭方式はこれまでの残柱式を廃止して長壁式が全面的に採用された（大正一二年・

一九二三）。残柱式では炭層の中を炭柱を残しながら掘り進む方式であるが、長壁式では幅四〇メートル程度（後に七〇～九〇メートルと長くなる）の炭層を一度に掘り崩し、掘った跡をボタ^(注3)で充填していく方式である。主要坑道を炭層下の岩石中に掘進する盤下坑道方式が採用されたこともある。機械化しやすく坑道維持が容易で、自然発火や坑内火災の予防上からも好ましく、災害の際に密閉により被害を局所に限定できるメリットがあった。

次に、圧気作動式の、石炭を掘り崩すコールピックが使用されるようになり、ツルハシの時代は終わつた。圧気動力はガスに対しても安全であるため、以降電力と並び坑内主要動力として閉山に至るまで使用された。さらに、掘った石炭やボタの運搬も機械化され、エンドレス巻きのチェーンコンベヤー、次いでベルトコンベヤー（昭和一年から）が使われて、コンベヤー方式による運搬は、運搬史上的一大改革となつた。

また、実際の端島炭鉱の状況について昭和一六（一九四一）年二月二八日付『長崎日日新聞』が「来て見て驚く科学の粋」と題して次のような現地ルポを掲載しています^(注4)。

長い坑道を物珍しく見物して採炭の現場につく。採炭といえば鶴嘴を思い出すが、時代はそんな悠長なことでは間に合わぬらしく、ピックとよぶ電気仕掛けの採炭器でどしどし掘り崩している（中略）物凄いダイナモの喰り、これは地下水を排除する動力の音である。一千尺の穴蔵のなかにあって呼吸も何ら異常がなく、つきものの瓦斯の臭い一つしないというのは理想的な通風機をもつて地上の新鮮な空気を絶えず送つているからだ。すべてに科学の力を利用されているため、坑内で危険を感じるようなことは全然ない。勿論、全くの素人で炭坑に飛び込んだ勤労奉仕隊員も喜んで仕事を従事している。（中略）そしてまた世間がいつているような地獄でないことを認識されたと思う。労務者たちの顔は社会人が炭坑を正しく知つてくれることを希望しているのだ。

『軍艦島に耳を澄ませば』にも「端島は何でも機械で動いたし最高の機械を使っていた」という証言があります。「徴用工たちはふんどし一つで二尺層をよこになつてツルハシで掘つていた」「坑内は有毒ガスが頻繁に発生していた」などという韓国側の主張がいかに荒唐無稽であるかお分かりでしょう。当時の端島炭鉱の現場のことを何も知らないまま、単に想像で「日本の虐待行為」を作り上げていることが、これだけでもよく分かります。

なお、MBC放送や『軍艦島——恥ずかしい世界文化遺産』などは、坑道は地下一〇〇〇メートルで現場は四五度の灼熱地獄だったと言つていますが、著者が元島民から直接聞いた話では、

戦時中は地下七〇〇メートル強にしか達しておらず、坑内は最高三五度だったそうです。もちろんふんどし一つで横になつて掘るようなことは全くなかったと証言しています。

働いた時間は日本人も朝鮮人も同じ

朝鮮人労働者が一日一二時間から一六時間の重労働をさせられたという証言が『軍艦島に耳を澄ませば』に出てきます。しかし現在の基準から見れば重労働でも、労働基準法などが整備されていない時代においては一〇時間から一二時間労働は日常的に行われており、まして戦争中ともなれば、勝つために少しでも多くの石炭が必要ですから、一五時間前後となることもあります。

端島島民の会の会長である加地英夫氏も、その著書『私の軍艦島記』（長崎文献社）の中で「昭和一八（一九四三）年、戦争はますますはげしくなり、労働時間は石炭増産のために一日一二時間になりました。（中略）父は朝早く出勤し、夜遅く帰つてくるので、みなそろつて食卓をかこむことはあまりありませんでした」と書いています。

日本人も朝鮮人も勝利を目指して頑張りました。もちろん労いた時間に日本人も朝鮮人も変わりはなかつたのです。

日本人による朝鮮人への「暴行」はなかつた

日本人は世界に類を見ないサディスティックな民族であり、日本に強制連行された朝鮮人は絶えず日本人からひどい暴行を受けていた。

これが現在の韓国における一般常識であり、韓国で発刊される数々の書籍にも、このような日本人の残虐性がまことしやかに書かれています。

一方、日本で発行された『軍艦島に耳を澄ませば』にも「（端島で亡くなつた朝鮮半島出身者のうち）合計二〇人はほとんど全て日本人労働者や監督たちによる私刑、リンチ、虐待、暴行によるものと推定することができる。そしてこの推定はほとんど誤まっていないと確信する」と書かれています。

しかし、私たちの父祖がそのようなサディスティックであったとは、到底信じられません。商社で三〇年海外貿易を担当し、海外文化の実態を肌で感じてきた著者は、日本人ほどやさしい民族は他にないと確信しています。正直で嘘をつかず、残虐なことを「穢れ」として忌み嫌い、和を尊んで相手の気持ちに最大限配慮する日本人の特性は、縄文時代から脈々と受け継がれ、日本人のDNAに深く刻み込まれています。残虐行為に耽るような民族とは対極的な、全

てにおいてやさしい民族なのです。

元島民の方々も、内外からの「軍艦島では朝鮮人が虐待された」という非難に対し、怒りを込めてこう証言しています。

「何十年と端島に住みましたが、虐待したとかそういうことは絶対にありません」^(注5)

「日本人と朝鮮人がケンカをすると、日本人がね、会社に呼ばれておこられていた」「確かに暴力による罰はあつた。けれどそれは「サボる人」に対して。罰は日本人も朝鮮人も同じで、差別は全くなかった」^(注7)

「朝鮮人労働者が虐待されたという話ばかり。欺瞞と虚偽と誇張に塗り込まれた記事が横行していることに憤りを感じる」^(注8)

「端島について書かれた本を読むと端島が（ナチスドイツによる）アウシュビツ収容所と同一だと書いてあり、頭にきた。本に書いてある嘘を暴いて、これが眞実であることを内外に言わなければいけない」^(注9)

「韓国では端島を『監獄島』『地獄島』と言っているそうだが、われわれはそんなところに住んだ覚えはない。日本で重い罪を犯して無期懲役を受けた者が軍艦島に来ていると書かれているが、私たちは違う」^(注10)

また、『軍艦島に耳を澄ませば』には警察による暴行の証言もありますが、元島民の一人は次のように否定しています。

「それがでたらめっていうのはね、警察官は坑内のこととはしないんですよ、絶対。（坑内のことは）保安監督署がするから坑内のこととは警察がするもんじゃない」^(注11)

興味深いことに『筑豊・軍艦島』には「端島炭鉱の外勤労務係はみんな朝鮮人で、同胞に対するは特別に厳しかった。朝鮮人坑夫を何人入坑させたかが腕の見せどころで、叩いてでも無理に入坑させた。それが労務係の評価に繋がるのだつた」（傍線筆者）とも書いてあります。それならもし朝鮮人坑夫が誰かに叩かれたのであれば、叩いたのは朝鮮人だつたことになります。

『百万人の身世打鈴』百万人の身世打鈴編集委員編（東方出版）に佐賀県西松浦郡に作業所があつた川南造船所で当時働いた裴來善という人物の回想が載っています。その頃の状況が分かれますので一部引用します。

「私の班には当時三二歳の李という人がおりましてね。(中略) ところがこの人が現場監督にしようつちゅう暴行を受けるのですよ。その監督ちゅうのが同じ朝鮮人なんですね。(中略) 日本の工場はどこでもそうだけど、朝鮮人を使うときは朝鮮人の現場監督を使うんだよ。同じ朝鮮人同士でいがみ合わせるってわけですよ。それが本当の植民地支配。「おまえは同じ民族じゃないか。何でおれを叩くか?」つてものごすごく憎むんですね。日本人だつたらそうでもないと思うんですが」

この本は日本の「植民地支配」を糾弾する視点から編集されていますので「それが本当の植民地支配」というフレーズが飛び出していますが、実際問題として言葉も通じない朝鮮半島出身者を雇用する場合、その管理を同じ朝鮮人にまかせるのは当然であり、端島でも同じでした。従つて、もし端島で「朝鮮人虐待」があつたとすれば、それは朝鮮人の間で起きたのではないでしようか。映画『軍艦島』でも微用されたやくざの親分が朝鮮人労務係の横暴に怒つて大げんかをするところがあります。この映画では珍しく、「では実態らしい場面を描いています。

中央協和会の指導方針 「体罰は指導者の力不足」

『在日朝鮮人関係資料集成（第五巻）』朴慶植著編には、厚生省・内務省の外郭団体である「中央協和会^(注12)」が作成した「移入労務者生活訓練必携」が含まれています。そこには朝鮮半島出身者への指導方針が列記されており、その冒頭部分には次のような指示があります。

- 一、「日本人」と「朝鮮人」と対立的に言つたり「鮮人」「朝鮮」などと云ふ蔑視的な言葉づかひはいけぬ。「内地の方」「朝鮮の方」「半島同胞」と云ふ様にすること。
- 一、腹が立つことがあつても、一步高いところに自分を置いて公衆の面前で罵倒したり、殴つたり、叱責することなく、親切に何回でも手に取るように教えてやらなければならぬ。体罰を加えることは指導者の人格の力の不足を語るに等しい。
- 一、この職場にさえ居れば経済に於いても生活に於いても疾病等の時、決して不安はないといふ信頼感を養うこと。
- 一、指導者の名を以て、郷里に稼働状況、貯金高、健康状況、その他近況を知らせて、父母親族に安心を得せしめるよう通信をすることは必要である。

言葉づかいにも気を遣い、体罰を加えるのは指導者の人格の力の不足と指摘しています。虐待どころか、当時日本側が朝鮮半島出身者にいかに気を遣っていたか、この資料からも明

らかでしょう。

死亡率は日本人も朝鮮人も同じ

『軍艦島に耳を澄ませば』には「火葬埋葬認許証」の数字を基に「日本人よりも朝鮮人の方が死亡率が高い。慣れない危険な仕事をさせた証拠である」という記載があります。しかしながら筆者が『炭坑誌 長崎県石炭史年表』前川雅夫編（国立国会図書館蔵）（以下『石炭史年表』）で確認しましたところ、昭和一〇年から二〇年までの端島炭鉱で起きた死亡事故と犠牲者数は次の通りです。

昭和一〇年 三月 ガス爆発事故	日本人一八名 朝鮮半島出身者九名死亡
一年一〇月 落盤死	日本人一名 死亡
一二年 五月 事故死	日本人一名 ケージに触れ死亡
一三年 六月 落盤死	日本人一名 死亡
一七年 六月 事故死	日本人一名 坑木割碎中破片に当たり死亡
	日本人一名 墜落事故により死亡

一九年七月 ガス噴出事故

五名 死亡（出身地内訳なし）

『軍艦島に耳を澄ませば』に登場する証言者は「落盤で月に四五人は死んでいったでしょう。今のような安全を考えた炭鉱では全然ないですよ」と言っていますが、同書の中にあるリストでも落盤事故発生件数は昭和一〇年から二〇年の間で一二件に過ぎません。また『石炭史年表』によれば落盤で死んだ人は一〇年間で二人でした。端島炭鉱では最先端の技術を導入し、安全面についても最大限重視していたことは先に述べた通りです。

なお、同書によれば昭和一八（一九四三）年六月に「ロープ切断事故」によって朝鮮人労働者二人が亡くなつたとあります、『石炭史年表』では確認できません。一方、昭和一〇年の事故について同書は朝鮮人二名の死亡者があつたと記述していますが、『石炭史年表』では朝鮮人死亡九名となっています。いずれにせよ『石炭史年表』に従えば事故死者の多数は日本人です（一九年七月の事故も犠牲者は全て日本人という証言あり）。

また、死亡率について九州大学の三輪宗弘教授が、石炭統制会が作成した資料（茨城県立歴史館所蔵）を調査したところ、日本人労働者と朝鮮人労働者の死亡率には、ほとんど差がないことが分かりました（注13）。

端島炭鉱における事故死の実態は右の通りであり、櫻井よしこ氏は平成二九年一二月四日付

産経新聞「美しき勁き国へ」の中で元島民の次のような証言を紹介しています。

「自分は死んでも（朝鮮人の）部下を殺すような風習はない。それくらいにやつぱり人間味のある、端島独特のですね、人情論ですよ」

「一度入つたら生きて出ることができない地獄の島軍艦島」という韓国側の主張は全く根拠のない作り話だったのです。

朝鮮半島出身者の遺骨は丁寧に扱つた

『筑豊・軍艦島』には「仲間が事故死して火葬が終わると、監視についてきた労務係の命令で遺骨をスコップですくい取り、廃坑に投げ込んだ」とありますが、恐らく骨壺に入りきれずに残った遺骨をスコップのようなもので捨てたのではないでしようか。

実は九州ではこれが当たり前のことなのです。筆者の家の父親を長野の佐久で見送った時は、最後に残った灰まで全て刷毛で集めて丁寧に骨壺に入れました。ところが続いて筆者の実父が熊本で亡くなつた時は、小さな骨壺に遺骨を無理やり詰め込んで、火箸のようなものを突つ

込んでザクザク碎きだしました。「なんとご無体な」と思ったのもつかの間、係官は残つた遺骨を塵取りみたいなものに入れていました。「それどうするのですか」と思わず聞いたところ「ああ残つたのは共同骨捨て場がありますから」との答えが返つてきて、びっくり仰天でした。端島でも、熊本と同じように残つた遺骨を決まつた場所に捨てたのでしょうか。それを『筑豊・軍艦島』の証言では、誇張して遺骨の全部を捨てたようになつてているのではないでしようか。

但し、火葬すら「二度も殺すのか」と忌み嫌い、遺体を大切に土葬にする朝鮮の人々のメンタリティを思えば、残つた骨を捨ててしまつことに怒るのも「むべなるかな」と思わないこともあります。

しかしあくまでも日本の伝統に従つて丁寧に扱つたことには変わりはなく、日本人がそれに負い目を感じることは全くありません。

なお、朝鮮半島出身者の遺骨は丁重に故郷に送り届けています。元徴用兵だったというチエ・チヤンソプ氏は映画『軍艦島』を見た後で「映画の内容が事実とは異なり誇張されている」と韓国日報の記者に述べており、「端島で働いて亡くなつた人は多かつたが、日本人は遺体をちゃんと弔つて、韓国に送還していた。それだけは実に善良によくやつた」と証言しています。

(注1) 平成二九年六月七日付産経新聞「歴史戦・反日ネットワーク」より

(注2)

『足で見た筑豊 朝鮮人炭坑労働の記録』金光烈(明石書店)

(注3) ボタとは掘った石炭と一緒に出てくる岩石屑。

(注4) 「Hanada」平成二九年一月号「微用工は不幸だったのか①軍艦島」鄭大均より

(注5) 平成二九年一二月四日付産経新聞「美しき勁き国へ」櫻井よしこより

(注6) 「軍艦島に耳を澄ませば」一七四ページ

(注7) 「正論」平成二九年九月号「世界遺産『軍艦島』を韓国映画の捏造から守る」杉田水脈より

(注8) (注9) (注10) 平成二九年二月八日付産経新聞「『歴史戦』軍艦島を歩く 憤る島民「嘘暴く」「アウシユビツチとは違う」」より

(注11) 平成二九年一二月二四日付産経新聞「『歴史戦』軍艦島旧島民らの証言動画公開「地獄島じやない」」反論より

(注12) 中央協和会・全国各地に存在していた行政レベル、民間レベルでの内地在住朝鮮人に対する援助、互助団体を昭和一四(一九三九)年に「地方共和会」として統合再編制し、その現役幹部によって中央協和会が作られ、厚生省・内務省の外郭団体となった。

(注13) 「歴史通」平成二九年四月号「韓国『日帝強制労働歴史館』の嘘八百」三輪宗弘より

第七章 「軍艦島から脱走」の真実

いろいろな人々が混在していた「軍艦島」

『筑豊・軍艦島』には「(朝鮮人労働者は) 奴隸的な労働に耐えられず、最後の手段として島からの逃走を試みた」と書かれています。

では脱走者の実態はどうだったのでしょうか。それを明らかにするには、当時端島にはどのような人々が働きにきていたのかを知つておく必要があります。

明治時代に「納屋制度」という炭鉱で働く人を集めための制度ができました。これは納屋頭が坑夫を募集し、納屋に住まわせて食事を与え、作業の監督をするものです。

ところが、納屋頭が地方の博徒などに人集めを依頼した結果、誘拐同様の手口で坑夫がかき集められる事態が起きました。彼等は各地の炭鉱で過酷な労働を強いられ、怠けると棍棒で殴られました(注1)。

納屋頭が坑夫の給料をピンハネすることも日常茶飯事であり、また、会社の生産計画に比べ